

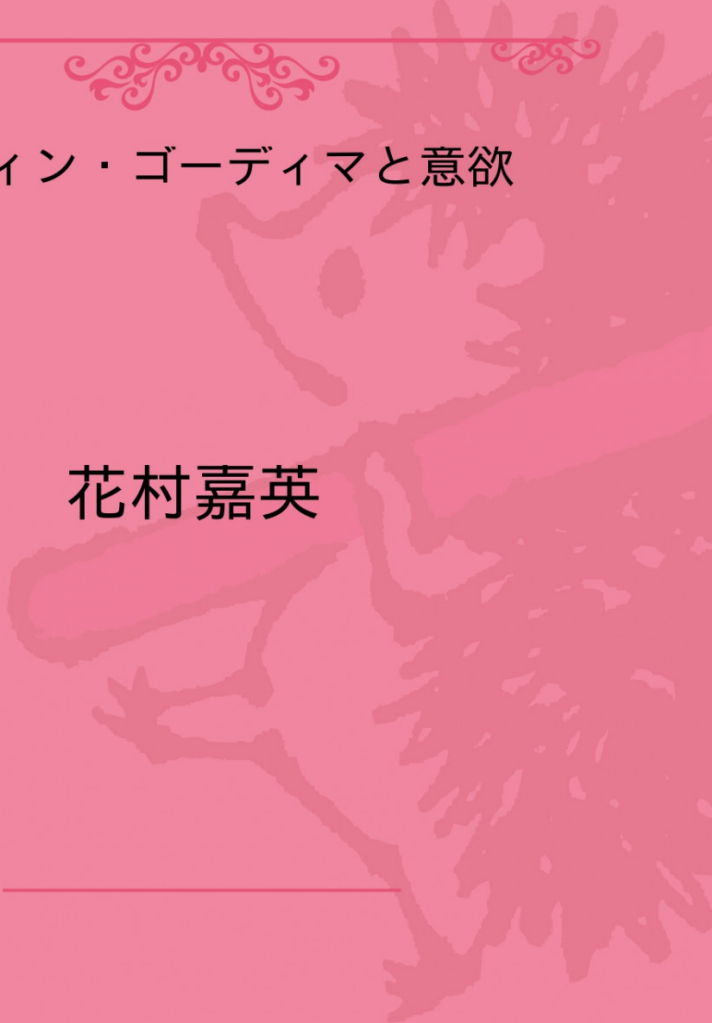



シナジーのメタファー  
について考える



ナディン・ゴードイマと意欲

花村嘉英





# 目次

シナジーのメタファーとは何か . . . . .	1
人文科学からマクロを目指す . . . . .	2
Lのフォーマットで文学を比較する . . . . .	4
シナジーのトレーニング . . . . .	6
ゴードィマの “ <b>The Late BourgeoisWorld</b> ” (1966年) . . . . .	8
井上靖の「わが母の記」(1975年) . . . . .	11
シナジーのメタファーのメリット . . . . .	13
まとめ . . . . .	15
参考文献 . . . . .	16



## シナジーのメタファーとは何か

文学分析は、通常、読者による購読脳が問題になる。一方、シナジーのメタファーは、作家の執筆脳を研究するためのマクロの分析方法である。基本のパターンは、まず縦が購読脳で横が執筆脳になるLのイメージを作り、次に、各場面をLに読みながらデータベースを作成して全体を組の集合体にする。そして最後に、双方の脳の活動をマージするために、脳内の信号のパスを探していく。

執筆脳の定義は、作者が自身で書いているという事実及び作者がメインで伝えようと思っていることに対する定番の読みとする。そのため、本論では、井上靖に関する購読脳の研究よりも、私の著作、即ちトーマス・マン（1875年－1955年）、魯迅（1881年－1936年）、森鷗外（1862年－1922年）の執筆脳に関する研究を先行研究とする。また、執筆時の原稿の調査についても、編者は文字データに関する校正を担当するため、作家が書いた最終原稿の段階を前提にする。

トーマス・マン、魯迅、森鷗外の著作の中では、それぞれの作家の執筆脳として文体を取り上げ、とりわけ問題解決の場面を分析の対象にしている。今回はそれに加えて、マクロの分析を意識し、地球規模とフォーマットのシフトについてもナディン・ゴードイマ（1923年－2014年）と井上靖（1907年－1991年）を交えて説明する。

筆者の持ち場が言語学であるため、購読脳の分析の際に、何かしらの言語分析を試みている。例えば、トーマス・マンには構文分析があり、魯迅にはことばの比較がある。そのため、全集の分析に拘る文学の研究者とは、分析のストーリーに違いがある。文学の研究者であれば、全集の中から一つだけLの分析のために作品を選び、その理由を述べればよい。

## 人文科学からマクロを目指す

### 2.1 地球規模とフォーマットのシフト

文系は人文、文化、社会、理系は情報、バイオ、医学とそれぞれ系列が3つずつある。どの系列でもミクロとマクロを想定し、マクロの項目を地球規模とフォーマットのシフトにすると、こぼれる人はいなくなり、一応の目安に届けば自ずと研究は発見につながっていく。人文科学の場合、地球規模は東西南北となり、フォーマットのシフトは、Tの逆さの認知の定規をLに分けることを指す。

こう考えるための客観的な証拠は、私の学歴や職歴にある。元々、ドイツ文学や言語学を専攻し、人文と認知科学を研究してきた。また、職歴は、日本語教授法と機械翻訳が中心で、実務や資格を重ねながら翻訳の作業単位を調節している。例えば、ドイツ語と文学、中国語と法律（契約書）、英語と情報、ドイツ語とバイオ、英語と医学などである。文系と理系について交互に記事を書くとき、文体の調節としてこうした実績が役に立っている。

また、東西南北は、適当に国地域を選択すればよい。私の場合は、日本やドイツそしてアメリカが先行し、そこには東西があり、その後日本と中国やアパルトヘイトとナチスから南アフリカとドイツという南北が出てくる。これは、私の著作を読めばわかることであり、それが客観的な証拠となる。さらに、自分が読める言葉を増やしていけば、日本と豪州、北米と南米という組ができ、研究の対象がオリンピックに近づいて行く。

フォーマットをシフトするには、Tの逆さの定規を崩して縦横に言語と情報の認知を置き、Lのフォーマットを作成する必要がある。その際、信号がスムーズに横をスライドするように、翻訳の作業単位を使って調節していく。これがデータベースを作るときに、テキスト共生の基礎として役に立ち、文学分析にも影響を及ぼす。

こうして獲得した知識を基にして、シナジー・共生の組を作っていく。組が増えれば、自ずと研究がシナジー論になるためである。バランスを整えるために2個2個のルールを適用する。シナジーの組については、例えば、言語と情報（コーパス、パーザー、翻訳メモリー、計量言語学）、文化と栄養、心理と医学、法律と医学、法律と技術、社会とシステム、社会と福祉、経営工学、ソフトウェアとハードウェアなどが想定される。そして、文学とデータベースがこの並びに加われば、シナジーのメタファーの研究も大きな評価となっていく。

このように考えると、マクロの項目として地球規模とフォーマットのシフトを調節するには、日頃からのトレーニングが必要不可欠になる。



## Lのフォーマットで文学を比較する

パイロットによる緊急着陸とか災害や救急の医療または株式市場の現場で働くエキスパートと同様に、作家もリスク回避をテーマにして作品を書くことがある。例えば、トーマス・マンは、20世紀の前半にドイツの発展が止まることを危惧して小説や論文を書き、魯迅は、作家として馬虎（詐欺をも含む人間的ないい加減さ）という精神的な病から中国人民を救済するために小説を書いている。また、森鷗外は、明治天皇や乃木大将が亡くなってから、後世に普遍性を残すために歴史小説を書いた。

トーマス・マンの文体は、イロニーである。「魔の山」（1924年）に限らず、マンは、散文の条件として常に現実から距離を取る。現実を正確に考察しながら、一方で批判するためである。このイロニー的な距離は、正確に記述しようとしても、言語媒体そのもの特徴からあるところで制限される。

また、ロトフィ・ザデーのファジィ理論は、システムが複雑になると、振舞いについて正確ではっきりとした説明ができなくなることを主張する。つまり、両者共に物事を深く突き止めて行ってもそこには限界があり、深追いしないと逆に良い結果が得られることを論じている。（花村 2005：113）そこで、「魔の山」の購読脳を「イロニーとファジィ」とし、そこから「ファジィとニューラル」という組に向かい、マンの執筆脳であるファジィを引き出した。

魯迅の文体は、従容不迫（落ち着き払って慌てないという意味）で、持ち場は短編である。「狂人日記」（1918年）と「阿Q正伝」（1922年）に対する解析を「記憶と馬虎」にし、これを「記憶とカオス」という生成イメージに近づけるため、場面を作業単位にしてL字の解析と生成を繰り返す。すると馬虎という無秩序状態にある人々の予測不可能な振舞い（非線形性）及び刑場に向かう阿Qと荷車運搬人の近似入力がかく異質の出力になる様子（初期値敏感性）が見えてくる。（花村 2015：75）

森鷗外は、明治天皇や乃木大将の死後、それ以前の文語体ではなく口語体で歴史小説を書いた。歴史小説は、誘発が強い作品と創発が強い作品に分けることができる。例えば、「山椒大夫」（1914年）の購読脳は、誘発強と創発弱になり、「佐橋甚五郎」（1913年）はその逆になる。また、誘発と創発を合わせた情動と尊敬の念からなる感情を行動と組にして、それを森鷗外の執筆脳とし、作成したデータベースから購読脳と執筆脳をマージして、バラツキによる統計処理を試みた。（花村 2017：125）

三人の作家の上記作品を比較してみると、全て医学情報を含んでいるため、作家が伝えようとする定番の読みとマージ可能な脳内の信号のパスを探すことにより、シナジーのメタファーは想定できる。脳の活動といっても、人文の研究対象が言語や文学であるため、例えば、五感の情報が脳内で伝達される様子について考えている。





## シナジーのトレーニング

花村（2017）では、人文科学が専攻の人たちのためにシナジーのトレーニングとして組のアンサンブルを説明している。シナジーという研究の対象は、元々が組からなっているためである。例えば、手のひらを閉じたり開いたりするのも、肘を伸ばしたり畳んだりするのも運動というシナジーである。Lのモデルができるだけ多くの組を処理できるように、シナジーの研究のトレーニングとして三つのステップを考えている。

まず、2.1 に記したシナジーの組み合わせから何れかの組を選択し、研究の方向を決める。組み合わせについては、複数対応できることが望ましい。次に、選んだ組からLに通じるテーマを作るために、人文科学と脳科学という組のみならず、ミクロとマクロ、対照と比較の言語文学、東洋と西洋などの項目を考える。また、「トーマス・マンとファジィ」は、ドイツ語と人工知能という組であり、「魯迅とカオス」は、中国語と記憶や精神病からなる組である。そこには洋学と漢学があり、また長編と短編という組もある。

表1 テーマの組

### テーマの組 説明

文系と理系 小説を読みながら、文理のLのモデルを調節する。

人文科学と社会科学 文献学とデータの作成または統計処理を考える。

言語と文学 対照と比較双方の枠組みで小説を捉える。

東洋と西洋 東洋と西洋の発想の違いを考える。例、東洋哲学と西洋哲学、国や地域における政治、法律、経済の違い、東洋医学と西洋医学。

基礎と応用 まず、ある作家の作品を題材にしてLのモデルを作る。次に、他の作家のLのモデルと比較する。

伝統の技と先端の技 人文・文化の文献学とシナジーのストーリーを作るための文献学（テキスト共生）。ブラックボックスを消すために、テキスト共生の組を複数作る。（人文と情報、文化と栄養、心理と医学など。）

ミクロとマクロ ミクロは主の専門の調整、マクロは複数の副専攻を交えた調整。少なくとも縦に一つ（比較）、横にもう一つ取る（共生）。

さらに、テーマを分析するための組が必要である。例えば、ボトムアップとトップダウン、言語理論と翻訳の実践、一般（受容）と特殊（共生）、言語情報と非言語情報など。

## 表2 分析の組

### 分析の組 説明

#### ボトムアップと

トップダウン 専門の詳細情報から概略的なものへ移行する方法。及び、全体を整える概略的な情報から詳細なものへ移行する方法。

理論と実践 すべての研究分野で取るべき分析方法。言語分析については、モンターギューの論理文法が理論で、機械翻訳が実践になる。

一般と特殊 小説を扱うときに、一般の読みと特殊な読みを想定する。前者は受容の読みであり、後者は共生の読みである。

#### 言語情報と

非言語情報 前者は言語により伝達される情報、後者はジェスチャーのような非言語情報である。

強と弱 組の構成要素は同じレベルでなくてもよい。両方とも強にすると、同じ組に固執するため、テーマを展開させにくくなる。

このようにして、Lのストーリーとデータベースから組のアンサンブルを調節し、トーマス・マンの「魔の山」、魯迅の「狂人日記」と「阿Q正伝」、さらには森鷗外の「山椒大夫」と「佐橋甚五郎」について研究をまとめた。Lのストーリーのための計算と文学のモデルは、こうした調節が土台になっている。

## ゴードィマの “The Late BourgeoisWorld” (1966 年)

ナディン・ゴードィマ (1923 年－2014 年) は、南アフリカの白人社会の崩壊を目指す反アパルトヘイト運動に白人がどのように関与できるのかを自問し、世の中の流れに逆流する自国の現状に危機感を抱いて、何らかの形で革命に関わりたいという意欲を持っていた。こうした作家の脳の活動は、南アフリカの将来を見据えたりリスク回避といえるため、特に、「意欲と適応能力」に焦点を当ててゴードィマの執筆脳について考察していく。

ゴードィマが “The Late Bourgeois World” (ブルジョワ世界の終わりに) を書いた 1960 年代前半の南アフリカは、ヘンドリック・フェルブールト首相 (在任 1958 年－1966 年) に象徴されるアパルトヘイト全盛の時代で、いくら適応能力があっても政治や法律によりそれを発揮できなかった。そのため、心の働きでは意欲が強くなり、それに伴う計画や判断を含めた脳の活動としては、前頭葉が注目に値する。

前頭葉は、頭頂葉や側頭葉といった他の連合野と相互関係にあり、また、本能を司る視床下部とか情動や動機づけの反応に対して判断を下す扁桃体と結びつきが強い。(Goldberg 2007 : 57)

“The Late Bourgeois World” は、マックスの死を知った私の一日というストーリーで、そこには小学生の息子ボボ、マックスの両親や妹夫妻、弁護士のグレアム、87 歳になる認知症の自分の祖母、運搬請負人のルークがいる。それぞれの場面で彼らがマックスのことを回想しながら、当時の南アフリカの革命に関わる一人の白人の意欲を問題にしている。

アフリカ民族会議やそこから分裂した過激派のパンアフリカ会議と並ぶ白人による反アパルトヘイト運動、アフリカ抵抗運動も、当時、盛んにサボタージュを繰り返した。1964 年 7 月の全国一斉捜査で活動家が逮捕され、所持していた文書や供述からアフリカ抵抗運動の活動が明るみになった。(福島 1994 : 187) 転職を繰り返すマックスは、こうした白人のサボタージュ運動に属していて、運動初期の段階で逮捕され裁判にかけられた。

重大な生活上の変化やストレスに満ちた生活が原因となる適応障害は、個人にとって重大な出来事 (就学、就職、転居、結婚、離婚、失業、重病など) が症状に先んじて原因となる。(日本成人病予防協会 (テキスト 3) 2014 : 55) マックスの場合、結婚離婚、就学就職、いずれもうまくいかない。地下組織の人たちと付き合いがあったからである。結局、死を選ぶため、社会に適応する能力がなかったことになる。

どうにもならない精神状態を説明するときに、ゴードィマは、メディカル表現を用いて問題解決を試みる。心を頑なにして精神を狭める精神的な動脈硬化は、白人居住区が汚染地区であるため、南アフリカの白人たち全員がその対象になる。当時の南アフリカ

の政治と法律に縛られた無限状態を表す「空間と時間」という購読脳の出力は、情報の認知を通して、新たな国作りのための意欲と精神的な動脈硬化を予防する適応能力という執筆脳の組と相互に作用する。

マックスは、精神的な動脈硬化に罹らないようにリスク回避を試みる。妹の結婚式におけるスピーチの場面では、マックスの脳内で快樂の神経伝達物質ドーパミンが前頭葉に分泌し、間脳を経て脳幹に信号が伝わっている。この場面では、妹にまつわる長期記憶とその後の彼らを占う作業記憶のうち後者が強いいため、ゴードイマの執筆脳は、前頭葉が活発に働いている。

前頭葉の一機能といえる意思決定は、唯一の答え、つまり真実を求める決定論型と優先事項に基づいた適応型に分かれる。ゴードイマとマックスの意欲は、適応型の意思決定（反アパルトヘイト）であり、そこに執筆脳に関する解決策を求めていく。

適応型の意思決定では、状況依存型と状況独立型のバランスを保つことが大切である。しかし、一概にそうはいかない。Goldberg（2007）によると、例えば、男性は状況依存形を好み、女性は状況独立型を好む。また、比較的变化が少なければ、独立型の方が懸命であろうし、不安定な状況では依存型の方が好ましい。さらに、無限の状態は変化に乏しいため、独立型が良いであろう。しかし、前頭葉の機能には、そもそも性差がある。（詳細については、第二章を参照すること。）

表3 前頭葉の性差

比較項目 男性 女性

適応型の意思決定 状況依存型を好む。状況独立型を好む。

状況依存型の

意思決定 左前頭前野皮質が活動する。左右両側の後部皮質（頭頂葉）が活動する。

状況独立型の

意思決定 右前頭前野皮質が活動する。左右両側の前頭前野皮質が活動する。

大脳皮質の

機能的パターン 左右の脳の違いが著しい。前部と後部の脳の違いが顕著。

言語情報の処理 左半球の前部と後部がともに活動する。左右の大脳半球の前頭葉がともに活動する。

脳内の結合部 片側の大脳半球の前後をつなぐ白質繊維束が大きく、片側の大脳半球の機能的統合が顕著である。左右の大脳をつなぐ脳梁の部分が太くて、大脳半球間の機能的統合が顕著である。

表3から見ると、女性であるゴードイマの執筆脳は、左右両方の前頭前野皮質が活動していたと想定できる。これが“The Late Bourgeois World”を読んで思う「空間と時間」という受容の読みを厚くしてくれる。

「空間と時間」という購読脳の出力は、意欲を通して適応能力となり、理解、思考、

判断などの総合能力によって将来を見据えた作家のリスク回避につながっていく。ゴードイマのLのストーリーは、縦の受容が言語と文学→言語の認知→「空間と時間」となり、横の共生が「空間と時間」→情報の認知→「意欲と適応能力」になる。そこから「ゴードイマと意欲」というシナジーのメタファーが作られる。また、作成したデータベースから記憶の種別を考えると、マックスの回想が場面ごとに見られるため、エピソード記憶が多い。

## 井上靖の「わが母の記」(1975年)

井上靖の「わが母の記」は、実母の終焉を綴った作品で、認知症の母を家族で支える様子が伝わるため、購読脳の出力を「認知症と適用能力」という組にする。次にこれが入力信号となり、情報の認知を通して作者の執筆脳に向っていく。井上靖の作品は、人間関係や出来事の描写が大変細やかで、常に場面毎のイメージが目には浮かぶ。そこで執筆脳を「記憶と連合野のバランス」にする。「わが母の記」は、「花の下」(1964年)、「月の光」(1969年)、「雪の面」(1974年)という3部作からなっている。また、筆者は、認知症予防改善医療団(DMC)の認知症ケアカウンセラー(2016年12月認定)である。

「花の下」では、八十歳になり物忘れがひどくなった母が何度も同じ事を言うようになる。郷里を離れ東京の末娘の桑子の家に移ると、認知症の症状が烈しくなり、親戚の秀才兄弟の話を一晩に何回もする。しかし、この位の軽度の認知症では日常生活に大きな支障は生じない。

「月の光」では、郷里で母が八十五歳になっており、同じ事をさも新しいことのように繰り返す異常さが認知症の進み具合を説明している。軽井沢の夏の家では、道を尋ねた女の幻覚が母の認知症の例になる。また、ある晩息子を探しに月明かりの道をさまよいて歩く徘徊もある。コミュニケーションが上手くいかず、家庭生活で支障が出る中程度まで認知症の症状が進んでいる。

「雪の面」では、母が八十九歳になり老耄も烈しくなっている。母が夜に目を覚ますと、懐中電灯で照らして部屋に入ってくる事件が起こった。孫娘の芳子にもうどこへも出してもらえないのねと囁いた。自分は閉じ込められ監禁でもされていると思っている。母の徘徊により家族が振り回されている。また、朝食を摂ったばかりなのに、やがて夕方か来ると思い込むこともあった。認知症は高度となり、家族の生活も崩壊寸前である。

認知症の患者は、 $\beta$ アミロイドの蓄積により脳内の神経細胞の神経繊維が萎縮するため海馬が萎縮してしまい、情報がスムーズに送れなくなる。また、受ける側の神経細胞も損傷し情報のやり取りがうまくいかなくなる。ここでは、作者の母の認知症のタイプをアルツハイマー型認知症としよう。日本成人病予防協会(テキスト6)(2014)によると、このタイプは、認知症の中でも最も多く、過去の体験を思い出せない記憶障害が出て、異常な言動を伴うことが頻繁に見られる。

購読脳の出力「認知症と適用能力」が執筆脳と想定している「記憶と連合野のバランス」と組になれば、シナジーのメタファーが成立するため、以下では脳のバランスの取り方について考える。

脳のバランスの取り方は、文体と同様に十人十色であり、生活や仕事上の工夫なども脳のトレーニングになる。連合野をつなぐ神経細胞のネットワークの舵取りは前頭葉が

しており、井上靖個人のバランスの取り方に近い一般の脳の活動が見えてくれば、「井上靖と連合野のバランス」というシナジーのメタファーを想定することができる。例えば、社会小説、教養小説、歴史小説というジャンルの違いから執筆脳の差異を分析するのも面白い。想定しているシナジーのメタファーの分析がさらに細くなるためである。

ゴーディマの中でも述べたように、男性と女性で前頭葉の調節には違いがあり、適応型の意思決定については、井上靖（男性）の場合、状況依存型を好む。さらに状況依存型において、男性は左前頭前野皮質が活動し、言語情報を処理する場合、左半球の前部と後部がともに活動する。また、男性は片側の脳半球の前後をつなぐ白質繊維束が大きく、片側の脳半球の前後の機能的統合が顕著である。（表3参照）

作者は、人間関係など熟知していることを前頭葉（思考、計画、判断）、側頭葉（聴覚）、頭頂葉（触覚）、後頭葉（視覚）などの連合野で調節しながら、家族人としてこの作品を執筆している。Goldberg（2007）によると、慣例化とか熟知性については、左前頭葉の活動が活発であり、未経験の課題、つまり新奇性は、脳の右半球と関係があるため、右前頭葉が活動する。マクロのバランスを整えるために2 x 2のルールがある。シナジーのメタファーの鍵となるLのイメージが組の集合体からなるため、ここでは二分率による問題解決を試みる。

「わが母の記」の執筆脳は、家族崩壊のリスクを回避するという優先事項に基づいた適応型の意思決定である。作者は、男性であるため状況依存型を好み、左前頭前野と共に言語情報を処理する作者の左半球が前後に活動している。作成したデータベースから作品の記憶を種別で見ると長期記憶が多く、意思決定は、優先事項に基づいた適応型であるため、作業記憶との関連も見られる。



## シナジーのメタファーのメリット

作家の執筆脳を探るシナジーのメタファーの研究は、①Lのストーリーや②データベースの作成、さらに③論理計算や④統計処理が必要になる。しかし、最初のうちは、ある作品について全てを揃えることが難しいため、4つのうちとりあえず3つ（①、②、③または①、②、④）を条件にして、作家の執筆脳の研究をまとめるとよい。以下に、シナジーのメタファーのメリットをまとめておく。

### 【メリット】

- ・作家の執筆脳を分析して組み合わせを作る際、定番の読みを再考する機会が得られる。
- ・データベースの作成は、作品の重読と見なせるため、外国語の習得にも応用できる。自分で理解できるのであれば、何語でもかまわない。
- ・データベースは、文系と理系のカラムからなりリレーショナルといえるため、人の目には見えないものが見えてきて研究者個人の発見につながる。その際、フロントのカラムだけではなく、セカンドのカラムも考えると分析が濃くなる。
- ・形態解析ソフトなど新たにインストールすることなく、マイクロソフトのWordやExcelで手軽に取り組むことができる。
- ・データ分析により平易な統計処理ができるようになる。
- ・論理計算を習得すれば、言語文学に関する認知科学の知識が増える。
- ・作家違いでデータベース間のリンクが張れると、ネットワークによる相互依存関係も期待できる。
- ・人間の世界を理解するには、喩えだけでは不足があるため、作家を一種の危機管理者と捉え、相互に依存した人間の条件を分析していく。例えば、危機管理者としてのボーダーラインを設定する。
- ・作家の執筆脳は、世界中であまり研究対象になっていないため、研究に取り組めば、難易度の高い研究実績として評価が得られる。
- ・ブログやホームページを公開する際、複数の言語を使用しながら、世界レベルの研究実績として紹介できる。

例えば、シナジーのメタファーを外国語の習得に応用する際、エクセルファイルのカラムAに原文を順次入力していく。入力が終わったら、各行の原文を読みながら一行ずつ購読脳と執筆脳のカラムに数字を入れていく。これがリレーショナルとなり、単なる

受容の読みとは異なるLの読みを提供するため、シナジーのメタファーを重読の一つに数えることができる。

また、非言語情報のジェスチャーに、セカンドのカラムとして、例えば、顔の部位の表情を加えると、脳の電気信号の流れを掴むための判断材料になるため、意義のあるものとなる。

## まとめ

今後は、作家の数を増やすことが課題になる。その際、バランスを意識して、東西南北とかオリンピックをイメージする。また、一作家の異なる小説間のリンクのみならず、作家違いでもデータベース間でリンクが張れると、予期せぬものが見えてくるため、シナジーのメタファーは分析力が上がっていく。文学をマクロに研究するには、やはり地球規模とフォーマットのシフトが必要十分な条件となる。

なお、本論は、中日教学研究会上海分会の『日 教育与日本学研究—大学日 教育研究 国 研 会 文集（2017）』の論文に加筆したものである。

## 参考文献

井上靖. 『わが母の記』. 東京 講談社, 2012

日本成人病予防協会監修. 『健康管理士一般指導員受験対策講座』. 東京日本医協学院, 2014

花村嘉英. 『計算文学入門ートーマス・マンのイロニーはファジィ推論といえるのか?』. 東京 新風舎, 2005

花村嘉英. 『从 知 言学的角度浅析 迅作品ー鲁迅をシナジーで読む』. 上海 理工大学出版社, 2015

花村嘉英. 『日 教育 划 ー面向中国人的日 教学法与森 外小 的数据 用 日本語教育のためのプログラムー中国語話者向けの教授法から森鷗外のデータベースまで』. 南京 南大学出版社, 2017

Elkhonon Goldberg. 沼尻由紀子訳. 『脳を支配する前頭葉』. 東京 講談社, 2007

Nadine Gordimer. *The Late Bourgeois World*. Penguin Books, 1966 (福島富士男訳『ブルジョア世界の終わりに』. 東京スリーエーネットワーク, 1994)



---

ナディン・ゴードイマの意欲について

---

著 花村嘉英

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---